水彩肖像畫法〔三〕

夢鷗生

衣服

衣服は肖像畫に對しては顏面を除いては甚だ大切なものである。衣服は年を追ふにつれて變遷し行くものである。現代の人には現今の衣裳を最完美なものであるとして古代の風を笑つてゐるが、將來幾十年の後には現代の人々が笑はれる樣になるのである。

人々の好もあらうが、まあ大抵は肖像畫の衣服は畫家の嗜好と撰擇とに任せるがよい。左なくとも少くも畫家の意見をきくの必要はある。

こんな話がある眞僞は保證は出來ないが、或る金滿家の妻君がサー、ジヨニア、レイノルヅの許に行つて、自分と夫の肖像を描いて呉れと依頼をした、そして一番費用の多くかゝる彩色は何でせうと問ふた、レイノルヅはオルトラマリンとカーマインですと答へた、すると其の妻君はそれでは私の着物をばオルトラマリンで夫の衣服はカーマインで彩つて下さいといふた。

ヴアンダイクやルーベンスやレンブヲンド。ウエラスクス。ムリロ。コレツチ等の大家は、一般に婦人又は小兒の皮膚に近く白色を配した事は觀察し得られる。サー、ジヨニアは、婦人又は小兒をば、白色のモスリンでか又は暖き調のニユートラルチント色の輕き衣裳で仕上げるが好きであつた。

概言すると、ヴアンダイクはレイノルヅよりも餘計に陽の色(ポシチーブ)を用ひた、されば三原色なる、赤、青、黃及褐色(ブラウン)又は鐵棕色(ドラブ)等の如き第三色を用ひる事が多く、綠や赤紫色(パープル)を用ひるは少なかつた。又スカーレツトに近い位の橙黃色の衣服を描きてそれに青を對照させたこともあつた。青は婦人には相當はしい色であるが、こんな寒色の多くを使ひこなすことは初心の畫者には因難な仕事である。

サー、ジヨニアは、一の畫中での明るき大部は暖かき、飽ける種類、即ち赤とか黃とかあらればならぬといふ

てゐる、ところがこの說を反駁する爲に、ゲエンスボローは『青衣の小供』なる名畫を描いた、この畫はクロスベノル。ガラーリーに藏してあるが、小供と等身の大さで、青き繻子の衣服をつけて、暖かき奧深き褐色に圍まれたるものである。

或る畫家は、此畫は慥にサージョニアの意見を碎き去るに充分であるといふ、サー、テー、ローレンスは、一部分は打勝つてゐるが全體に於ては左樣はいかぬといつてゐる。

ヴアンダイクは、皮膚の次ぎにはリンネンを置いてワームブラウンと青との對照を作り、後次第に赤とか、琥珀色とかの窓掛とか、椅子とかを繪面に加へ、第三次の色の衣裳等を描き加へた、かくして暖色と寒色との平衡を保ち、全體をば暖調のブラウンとグレーとの調和を得た。

又屢、頸の周りに鐵棕色の頸布を描いたことがあつた、これは肉の色を引き立たせる考へであつたらう。

レンブランドは黑い衣裳が好きであつた、この黑衣が形の上方部分に光を集めるのに都合良かつたのである。

採光

畫室に光線を入るべき窓は、蔭影を下方に作らしむる必要があるから、床から少なくも六尺なければいけない。サー、ジョニアの畫室の窓は床から九呎四吋ある、抽手で自由に上下し、又固定し得る裝置の窓扉(シャッター)があれば便利である。光線は最も大なる幅さを出來上りに與へる樣な方向から、被畫者の顏面へ投射するやうに入いらなければならぬ、若し又、被畫者が一方に坐して、光線の來る方向へ顏を向けたとしたら、鼻の蔭が最深く出來て適當なる高さを示すことが出來る、こんな姿勢をとつた時は、暗いバツクが必要だ。そして顏の蔭を柔和にするのである。

畫者の左から光線を採る樣にするはいふ迄もない事である。

形の素描

正確なる輪廓は最大切で、畫の基礎であるから、これがためには如何なる困難でも堪へて描かねはならない。不正な線を消し去る爲めに紙を汚損するといふ心配があるのなら、別の紙で素描をするが良い、そして其を引き寫しするのだ。

最初に頭の傾きを示す線を引く、眞正面ならば其線は垂直であるが、側面向ならば少し曲線になる、次に前の線を正しく直角に横ぎる一線を引く、その上に眼が出來るのである。それからこの線の下に一線又は二線三線を劃する、そして鼻、口、頭の位置を定める。

こんなのを基として形をとりはじめる、位置と割合とを違はぬ樣に、透視法にも當てはまる樣にして、且つ眞の形と發情とを失はぬ樣に注意する。

素描が仕上がつたなら、鏡の前に其を持つてくる、位置が裏反へしになるから不良の素描は直ぐに判かる、そして又訂正をする。

素描が完全に出來たら畫紙へ引寫をする。

肖像畫家で成功しやうと云ふには、唯だ畫が描けると云ふ許りではいかん、種々と不利な境遇、妨害の間に甘く描くといふのでなくてはいかん。と云ふのは、肖像に座る人で、畫かきの便宜を考へ、此方を助けるやうにやつて呉れる人は、實に稀である、大概は、唯だ自分獨りの樂許り考へ、畫かきの苦心は尠しも察せず、勝手氣儘に擧動(ふるまふ)のが通例である。それに又た、客の友人などがやつて來て、此方(こつち)の折角乘氣になつた心持を、全で毀して仕舞ふ——結局出來得る丈の方法で畫かきの邪魔をする。斯云ふ風であるから肖像畫家の上手といふ人は、唯だ畫が甘いといふ許りではいかん、種々の妨害の間に、甘く描けるといふ人でなければならん(岩村氏譯、**ノースコート畫談の一節**)